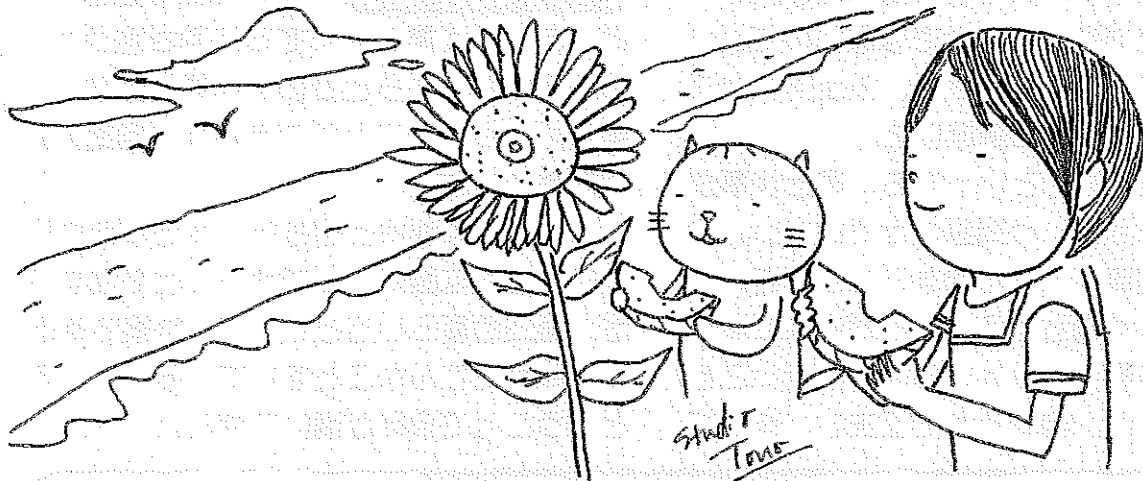


ボランティアグループがつくる嵯峨山県男女共同参画センターの書評誌

# この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



## ふたりのママから、きみたちへ

東小雪・増原裕子 著 イースト・プレス 2013年 (H:セクシュアリティ)

東京ディズニーリゾートで、史上初の同性結婚式を挙げ大きな話題となった、レスビアンカップルのふたりが、子供を迎えるための準備を始めた。本書は、将来、出会うことができるかもしれない、ふたりの子供に宛てて、それぞれの思いが綴られている。質問、疑問に答えるページもあり、読み進めていくうちに、各々のさまざまな葛藤と向き合いながらも、悩みぬき、愛し合い、信頼し、ふたりの子供を育てたいと思っていく過程が理解できる。

著者たちの体験から、セクシュアリティのことで悩んでいる中高生に向けた、ウェ

ブサイト、巻末には本書を読んだ人に「おすすめメディア」として本、映画、電話相談、NPOなどを掲載している。

この本で、前に進める何かがつかめるかもしれない。

愛が詰まった本です。ぜひ、手に取って読んでみて下さい。

(K)



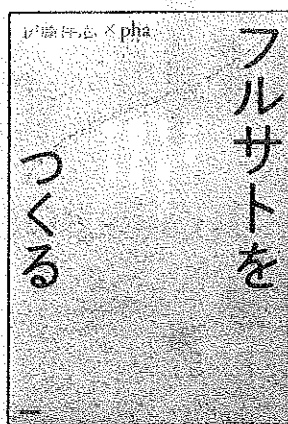
# フルサトをつくる 帰れば食うに困らない場所を持つ暮らし方

伊藤洋志・pha(77) 著 東京書籍 2014年 (O:その他)

この本は、仕事づくり「ナリワイ」の代表伊藤氏とニートで有名なpha氏が和歌山県の熊野にシェアハウスを持ち、都会暮らしでもなく田舎暮らしでもない、多拠点をもつ暮らしをどうつくっていったらいいかということを書いた本である。

伊藤氏は学生のころから頻りに熊野に通っていた。その人脈から家を譲ってもらえることになり、一人で住むには大きいし、一年をそこで過ごすわけではないのでということで友人に声をかけて、シェアハウスという拠点を熊野に確保した。

ただ田舎暮らしといっても、家と仕事があればいいかという問題だけではない。やはり人と交流し、文化的なこともでき、つまり「楽しく暮らせる」ことが条件になってくる。伊藤氏とpha氏はやりたいことを思いつくと、自分たちで工夫し、作って



いこうとする、またその制作過程がおもしろいのだという。そして、田舎ならコストが安いので場所代が安かったり、自分で作ったり、自給したりすれば、都会で店出すほ

ど、あくせく働かなくても採算が合うという。年収がいくらとかいう世界ではなく、自分がどういうことができるか（自給力）が問題なのだ。

このような都会と田舎をいったりきたりという生活は誰にでもできることではないが、第三の暮らし方としてこんな案もあるし、熊野でこんなことをしている人がいるということで興味が湧いてきた。(か)

## ほかにもこんな新着図書があります！

書名	著者	出版社
「家族」難民 生涯未婚率 25%社会の衝撃	山田昌弘	朝日新聞出版
女子のためのカラダ事典	小池ひとみ監修	新星出版社
オトメン(乙男)1~18巻	菅野文	白泉社
無業社会 働くことができない若者たちの未来	工藤啓・西田亮介	朝日新書
女性ためのリーダーシップ術	猪俣恭子	経営者新書
ぎゅっ	ジェズ・オールパラ	徳間書店
山女日記	湊かなえ	幻冬舎
自分を好きになる方法	本谷有希子	講談社
女性たちの貧困 “新たな連鎖” の衝撃	NHK「女性の貧困」取材班	幻冬舎
整理整頓 女子の人間関係	水島広子	サンクチュアリ出版
LGBTってなんだろう？	薬師実芳ほか著	合同出版

## 長い旅の途上

星野道夫 著 文芸春秋 1999年 (K:エッセイ・文学)

今いる場所から遠く離れた大海原で、この瞬間に鯨が遊泳している。当たり前でいて、何と深遠なことだろうと、ふと気づいた時から、はるかな大自然への憧憬を抱いていた著者。大卒後、親友の死をきっかけにアラスカへの一歩を踏み出し、ついには土地を買い、家を造って永住を決めた。

以来、極北の厳しい自然に生きる動植物や、オーロラ、流氷などの自然現象を撮り続け、そこにずっと昔から住み続けるエスキモーやインディアンたちとの交流をも深めていった。が、子供も生まれこれからという時無念にも、取材先のカムチャツカでヒグマに奇襲され急逝した。44歳だった。

この本は、亡くなる直前まで、長年にわ

たって折々の感動などを雑誌や新聞に掲載していたエッセイを集めたものである。

「アラスカの写真家のくせにどうしてこんなに文章がうまいんだってというほどいい文章」と、彼を熱愛してやまない作家・池澤夏樹に言わしめる珠玉のエッセイ集である。

ふと、今この時、に雪原を疾駆する数万のカリブーの群れを思いえがいてしまうような本である。 (大空)



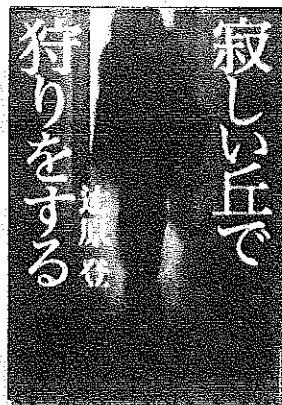
## 寂しい丘で狩りをする

辻原登 著 講談社 2014年 (K:文学・エッセイ)

あなたは、もし強姦されたら警察に届け出ますか？この小説の主人公・野添敦子は映画の編集の仕事をしていたが、元映写技師の押本に強姦され、それをもとに脅喝された。彼女は警察に届け出た。

そして彼は懲役7年の判決を受ける。敦子はマンションを引き払い、仕事先も変わった。だが、服役中の押本が敦子に逆恨みをし、復讐を企てていることを知る。

そして私立探偵として雇ったのがもう一人の主人公・桑村みどりだった。みどりは元恋人、久我から暴力を受け別れようとし



たが、しつこいストーカー行為を受けていた。みどりは敦子からの依頼の内容を調査し終わった後も彼女を放っておく事ができず、自分の意志で押本をなおも尾行する。そのみどりを久我が尾行する。

この小説は犯罪者やストーカー、そして被害者などあらゆる立場の者の心理描写が鋭くなされている上に、映画フィルムや裁判、探偵社の調査の仕方など詳しく書かれていて、それを読むだけでも、とても興味深い。

また犯罪者がどうやって被害者の居場所を捜し当てるのか、つまりどうすれば被害にあわないようにできるのかなど、色々な意味で驚くと共に参考になる小説である。

(花賀)

# 夫からのモラル・ハラスメント

～愛する人からの精神的イジメ

苦しいのはあなた一人じゃない～

まっち～ 著 河出書房新社 2014年 (D:女性・子どもに対する暴力)

モラル・ハラスメント(モラハラ)。最近、某タレントの離婚報道でこの言葉を知った方も多いのではないだろうか。本書の副題にあるように、平たく言えば精神的なイジメ、精神的暴力のことだ。著者は夫から受けた酷いモラハラの一部始終をブログで公開しており、本書は離婚に至るまでのブログの内容を書籍化したものである。イジメを受け続けていた著者は、次第に判断力を失い、夫と自分のどちらが正しいのかすら分からないような状態になっていたという。そんな時、モラハラという新しい言葉・概念と出会い、やっと自分が暴力を受けていると気づく事が出来たのだ。

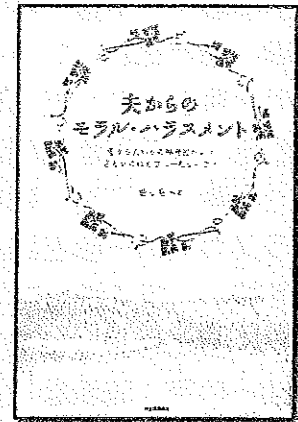
モラハラと精神的DVはどこが違うのだろう。そんな事を考えながら本書を読んだ。両者は重なる部分があると思ったが、モラハラは言葉巧みに相手を傷つけるため、こんなに苦しむのは自分が悪いからと思い込

まされてしまったり、時には夫がモラハラ加害者でないと信じたいという心理まで働いてしまうという。そして、モラハラ被害者の心は相当なダメージを受けているにもかかわらず、夫にされていることを

言葉にしてみても、よくある夫婦げんかのように見えてしまう。そのため、モラハラ被害は周囲からは理解されにくいのだが、著者の文筆力によってその実態がリアルに再現され、読者に痛みが伝わってくる。

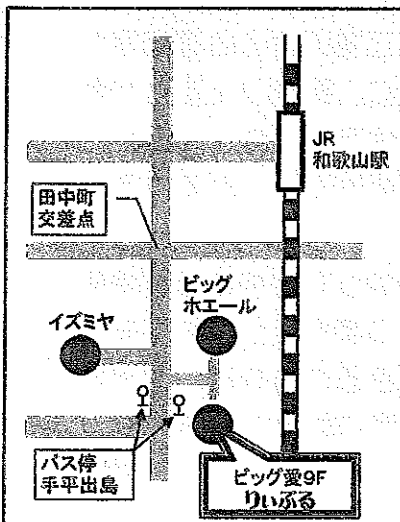
著者はモラハラ被害者をひとりでも多く救いたいと願い本書を著した。モラハラって何だろうという方も一度手にとって見る価値があると思う。

(0.5)



## ※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ  
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他  
P:AV資料 O:コミック R:NPOサポートセンター所蔵図書



この本よんだ? 第9号 (2015年8月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】3月から5月にかけて、りいぶるの図書室にたくさんの新着図書がはいりました。私たちは基本、図書室にある本から紹介していますが、メンバーの力量不足で専門的な分野の本はなかなか紹介できないのですが、みなさんも実際に手にとって探してみませんか。

これをお読みで何か始めたいと思っている本好きのあなた、私たちとボランティア書評誌を作ってみませんか? 興味のあるかたは、メールでお問い合わせください。E-mail [libreplus@yahoo.co.jp](mailto:libreplus@yahoo.co.jp)